

## 三人で死のう

福岡県 星野 ヨシ子

昭和十三年の秋、結婚と同時に渡満しました。大陸は気候風土が北海道と似て、広々とした所でのんびりと暮らしておりました。

まさか戦争など、考えたこともありませんでした。けれど忘れもしない、昭和二十年八月九日お盆も近いので、もち米でも買いに行こうと思っていたところ、開拓本部からの連絡で、小学校まで支給避難するようにとの連絡がはりました。ちょうど二十日前、主人は召集を受けて、ハルビンの部隊に入隊したばかりでした。私は不安にかられながら、二人の子供を連れて、着のみ着のまま、部落の方達と開拓部落を後にしました。その日から避難する場所すらない、長い長い苦難の日々が続く毎日となりました。

鉄道は破壊され三里の道を殆ど飲まず食わずに三日歩

き勃利の町につきました。もう子供は口も聞きません。半日ほど時間が過ぎた頃、幸い列車が来ました。皆こおどりして、満人の乗務員に頼んで乗せて貰いましたが、一駅乗せて貰っただけで、お金のない開拓団と知り降ろされてしまいました。皆で山中に入り隊の指揮に従って歩くこととなりました。まだ長男は五歳、三歳になる娘を背負い、私は六か月の身重で飲まず食わずの毎日で、団体の列からおくれるばかりでした。すっかり長男の手を引いています、ついおくれまいと手を引っぱると「足がお母ちゃん足が痛い」と泣きます。足を見ると破れた足袋の間から血がべっとり流れでています。背の子は「ひもじい」々と蚊の泣くような声でささやきます。三人で生きて行けるところまで行こうと決心しました。

しばらく行った向こうに、トウモロコシの畑を見つけました。天の助けとそれを手にして二つ三つもぎ取ったところを満人に見つけられ、刃物を持って追われました。殺されると思い、二人の子を自分の身体でおおいかぶせて地面に伏せ、今か今かと息を殺すときの長かったのが忘れられません。あわれと思ったのでしよう、許し

て貰ったときの貴重なトウモロコシは歩く長男に食べさせ、背中の子には、雨水のたまり水をのませる外はありませんでした。このままこの娘が死んでもそれまでの命と思ったり、いっそ三人で死のうかとなん度思ったことか……それは長い長い鉄橋にさしかかったときでした。

下を見ると目が廻るような高さで川の中を人間の死体と馬の死体が濁流に吞まれて行くさまはこの世の地獄絵そのものでしかありません。こんな戦争の中でもう主人は生きてゐる筈がないと思ひ、長男に「三人で死のう」と言いましたところ「いや死なん」その言葉が何千倍の励みとなりぶじ鉄橋を渡り梅林の町に着きました。町に着いて一緒に出発した六家族の中何人かに逢いましたが子供を置いて来たり、チフスで死んだ子を名もない土地に埋めて来たりあわれなことです。私は幸か不幸か「ラコー収容所から長春の収容所で死産で次男を亡くしましたが、運強く親子三人、昭和二十一年八月十八日博多港に上陸しました。

## 霊よやすらかに

福岡県 前田 トキ

私の両親は日露戦争後、郷里富山を後にし、中国の大連市に移りました。私共兄妹七人は皆満州生まれです。

私は二十二歳で、教師をしておりました主人と結婚、満州の南から北、東から西へと転勤、大東亜戦争の始まったときは、北滿の適道へ、参りました。そして終戦時は鴨緑江の近くの安東で迎えました。当時は物資の不足がひどく、配給通帳を持って安東の町中を走りまわったものでした。昭和二十年七月二十八日召集されました。働き盛りの四十歳、どこに行ったのか行方もわかりませんでした。

二十年八月九日、突然ソ連軍が安東に突入、夜はあちこちで銃声が聞こえ人のざわめきが聞こえて来ます。夫の召集した後は男児二人女児三人姉、私と心細い日々でした。あちら、こちらに暴民が侵入して来て手当り次第